

今日は、六月二三日に沖縄全戦没者追悼式で朗読される詩「これから」を朗読します。本作品の「これから」という題名は、「これから私たちには何ができるかということについても考えたくて、希望を持てる世界であってほしいという思いでつけたそうです。戦後七九年目の慰霊の日です。自分にとっての平和とは何か、私たちには何ができるのかを考えながら聞いてください。

これから 宮古高等学校三年

仲間 友佑

短い命を知ってか知らずか
蝉が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で
僕はまた天を仰いだ

海は青く
同じように太陽が照りつけていた
そういう普遍の中にただ
平和が欠けることの怖さを
僕たちは知っている

あの日から七十九年の月日が
流れたという
今年十八になった僕の
祖父母も戦後生まれだ
それだけの時が
流れたというのに

あの日
短い命を知るはずもなく
少年少女たちは

懸命に生きてくれた人々が
今日を創った
今日を繋ぎ留めた
両親の命も
僕の命も
友の命も
大切な君の命も
すべて
心に落ちた
あの戦争の副作用は
人々の口を固く閉ざした
まるで
戦争が悪いことだと
言っではいけないのだと
口止めするように
思い出したくもないほどの
あの惨劇がそうさせた

人は過ちを繰り返すから
時は無情にも流れていくから
今日まで人々は
恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた
あまりに大きすぎる悲しみを
手を繋ぐように
受け継いできた
それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りでさえも
まだ足りないというのなら
それでも変わらないというのなら
もっともっこのれからも
僕らが祈りを繋ぎ続けよう
限らない平和のために
僕ら自身のために
紡ぐ平和が
いつか世界のためになる
そう信じて

大切な人は突然
誰かが始めた争いで
夏の初めにいなくなった
泣く我が子を殺すしかなかった
一家で死ぬしかなかった
誰かが始めた争いで
常緑の島は色を失くした
誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい
話したい、笑いたい
そういくら繰り返そうと
誰かが始めた争いが
そのすべてを奪い去る

僕は再び天を仰いだ
抜けるような青空を
飛行機が横切る
僕にとつてあれは
恐れおののくものではない
僕らは雨のように打ちつける
爆弾の怖さも
戦争の「せ」の字も知らない

今年もこの六月二十三日を
平和のために生きている
その素晴らしさを噛みしめながら

心に落ちた
暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ

あの日も